□Miehe G.：**Langtang Himal. Flora und Vegetation als Klimazeiger und -zeugen im Himalaya** 494 pp. 1990. J. Cramer, Berlin. Dissertationes Botanicae 158として出版された本書は，ヒマラヤの植物相・植生の研究上に打立てられたひとつの金字塔といえる．本書に集大成された基礎資料は1986年に延9ケ月にわたって行われた現地調査によるものである．また，植生の比較・評価のために1984年南チベットのXixa-bangmaの海抜5000mから5820mでの調査も援用されている．

著者Georg Mieheはゲッチンゲン大学地理学研究所に籍を置く，植生地理学の専門家である．本書の大半は高山・亜高山植生の植生区分と群落の記述に当てられている．高山帯上部の散在する群落の識別，いわゆるmeadowに含められる植生の群落識別などでは種数も多く，同定するだけでも一大仕事である．著者はすべての植物の標本を作製し，大英博物館自然史部門(当時)で同定する一方，専門家に送り同定を依頼した．服部新佐，故井上浩，安藤久次，山崎敬，籾山泰一など多くの日本人研究者も同定に協力した．評者もベンケイソウ科，ユキノシタ科の標本を同定し，標本に混入がほとんどないなどその注意深さが強く印象に残っている．

群落組成にもとづく植生は植物相が解明されてはじめて解析が可能なのだから，こうした同定作業は当然の所為には違いない．しかし，特に日本人研究者によってヒマラヤ地域から報告された組成表は一部を除いて信用できなかっただけに，この当り前のプロセスを踏んで研究を積上げていった本書の誕生にまず敬意を表したい．評者は本書で対象としたランタン谷はいまだ調査したことがないが，他地域の高山帯の植生についても本書の記述は納得がいく．Mieheが記述しているのはミクロスケールの植生である．個々の群落はいわゆる表操作によってまとめられ，設定されるが，調査した群落の構成種をほぼ網羅していることに帰因するのだろうか，経験的印象に区分がよく合っているように思われる．

ランタン谷は中部ネパールでも特に植物相の多様な谷で，数多くの固有種が記載されている．巻末に付されたリストはその植物相の全貌を知るうえで有益である．およそ100点に達する種の分布図も興味深い．

日本では東大，京大，千葉大，科博などでヒマラヤ調査を行い，報告書も出している．調査そのものが制約を伴うことは仕方がないとしても，それに甘んじているところがあったのではないか．本書は当事者の一人として多大の反省材料にもなった．

最後に本書はネパール鎖国解除後に同国を訪れ，その植物相解明の基礎を築き，ランタン谷の植物学的魅力をはじめて明らかにしたOleg Poluninに棒げられていることを附記しておく．

（大場秀章）

□Bhandari M. M.：**Flora of the Indian Desert, Revised ed.** 435 pp. 1990. MPS REPROS, Jodhpur (India). U. S. $60. Indian Desertとは日本では聞き慣れない地名だが，インド•ラジャスタン地方の大半を占めるタール砂漠のことである．緯度的にはアラビア砂漠と同じで，その植物相の要素分析によるとアフリカ要素(37.0％)，東洋要素(20.6％)の両要素が大半を占め，固有要素は9.4％であるという．

著者のBhandariは同砂漠の中心都市のジョドプール大学名誉教授で，長らく同大学で植物学を教えていた．J. Bombay Nat. Hist. Soc. に10篇以上の論文を発表しているが，ほとんどがこの地域の植物新産報告と学名についてであったと記憶している．同書は好評だった同名のフロラの第2版で，全体にわたり改訂と増補がなされている．インドの地方植物誌はいまもJ. D. HookerのFlora of British Indiaの引き写しが多く，見るべきものがないが，本書は1959年までの文献を引用し，著者自身の見解でFlora of British Indiaとは異なる取り扱いをしている分類群もある．ただしBhandari自身は新種を発表したことはなく，本書にも新分類名はない．インドの地方植物誌として最も高い水準をいくものと思い，紹介した．

（大場秀章）